

教育の場における「同調圧力」

東京教育カウンセラー協会
代表 藤川 章

4年ぶりにコロナ後の日常が戻り、経済も文化も教育も、だんだんと元通りに回り始めました。今、マスクの着用は屋内でも個人の判断になりました。ところで、コロナ禍では「同調圧力（ピア・プレッシャー）」が大きな話題となりました。そこにはポジティブ・ネガティブの両面がありました。それについて少し私の考えを述べたいと思います。

日本には、古くは山本七平氏の「空気の研究」がありました。日本は欧米に比べて、論理より場の空気で組織決定されると、ネガティブな受け止めであったと思います。社会心理学の実験では、有名なソロモン・アッシュの同調行動の研究があります。同調とは人が態度や行動を他人（特に多数派）に合わせることを言います。実験では、七人のサクラと一緒に参加した被験者は、かなりの確率で、必ずしも納得していなくても、自分が孤立したり不利になることを怖れて、誤った答を選ぶというものでした。つまり、洋の東西を問わず、人は同調圧力に左右されやすいということです。

作家の鴻上尚史氏は、日本の社会の息苦しさの原因は「同調圧力」だと断定します。コロナ前から、教育の中で「同調圧力」が話題になるときは、学校の教室が子どもたちにとって息苦しいものだという否定的な言い方で語られてきました。それこそ、いじめを生み出す土壌だ、のような厳しい論調でした。これを、学校の先生たちは頷きながら、半分居心地の悪い気持ちで聞いたものです。それは、多分、学級集団では、良い意味の「同調圧力」を生かして、子どもたちの成長を促しているという実感を持っているからではないでしょうか。

たしかに、コロナ禍のマスクのときの自警団のように、「同調」を超え他人を「支配」または「束縛」するような圧力のかけ方は、仲間はずれ、村八分のような「いじめ」の土壌になり得ると思います。しかし、学校の先生たちは、運動や音楽が不得意な子どもにも、運動会や音楽会に積極的にかかわり、終わった後の満足感や成就感をもつ可能性を期待して指導します。その結果として、不得意なことを強要されて学校に行きづらくなる子どもと、仲間の支えをもとに成就感を得る子どもとでは、天と地の差ができます。

太田肇氏は『同調圧力の正体』の中で、イデオロギーとしての共同体主義がその正体だといいます。戦前の全体主義や国家主義と同義で語られているように感じます。

学校は子どもたちの共同体であることは間違いありません。そこで、識者が心配する共同体主義のあり方について、私たちなりの考え方をしっかりと持つ必要があります。

アドラー心理学が理論的根拠になると思います。アドラーは共同体感覚のために必要なこととして、次の3点を挙げています。自己受容、他者貢献、他者信頼です。クラスのために（教師のために）、一人一人の子どもがスポイルされることがないために、この3つを大切にすることが、共同体主義批判に対する答になると思うのです。